

## 弔 辞

店村さん

貴方はよもやわたしが貴方の弔辞を読ませて戴くようなことになるとは思われなかったでしょう。昔から老少不定と言われますが、わたしたちの場合は、ただ私がいたずらに永く生き残ってしまった気持ちです。

お互いに知りあったのは敗戦から10年もたった後のことだったと思いますが、考えて見るといろいろ不思議な縁で結ばれた人生行路だったと思います。あなたは外国語学校を卒業すると直ちに仏印で働き、シンガポールに移りというように、アジアの歴史の変遷の只中に身を置かれました。その頃わたしの方は日本放送協会の委嘱で、ヨーロッパ向けの放送をしていたのですが、日本が世界史の流れに逆らおうとしたとき、大学に戻って暴風雨（あらし）をさけたのでした。そして戦後わたしははじめて京都に移り、同志社にいたのですが、その頃のあなたは母校山城高校に戻り、天理大学で教え、新聞社につとめ、戦後10年ちかくたって同志社に来られたのでしたね。

やがてラジオでシャンソンの指導をはじめられた貴方をみて、現在の聖泉短期大学をつくるときに、是非にといいて貴方を推薦して下さった、後の同志社総長、上野直蔵教授は貴方のことをはじめからとても褒めておられたのでした。

その後如何にもフランス文学の専門家らしい店村先生だなど、遠くの方から眺めるような年月がたって行ったのですが、後から考えてみると、その間にあの立派なマルタン・デュ・ガールのお仕事をやっておいでだったのですね。その道の人びとに高く評価されたのに、周囲にいたわたしたち素人がほとんど何も知らなかったことをいまさらではありますが、恥ずかしく思い、お詫び申します。

それでも、貴方にしてみれば一つの大きな仕事をやりとげた満足感を

もっての大往生だったと信じます。奥様が白布をとって私に拝ませて下さった貴方のお顔は本当に知的で思索する書齋の文学者のお顔でした。わたしはあの最後の印象を生きている限り忘れないと思います。御遺族の方々もおなじ印象を語っておいでになりました。

貴方はいま地上の生活を終わられましたけれど、立派な御遺族を残されましたので、その方々が次つぎに貴方の衣鉢をついで行かれると信じます。

ご冥福を祈りつつ、弔辞とさせていただきます。

1991年8月24日

聖隷学園聖泉短期大学学長

伊 藤 規 矩 治